H24 4 5
No.1

平成2 4 年度 久原小学校校内研修推進プラン

ハイライト：

・まずは、昨年度の取組について成果と課題の明確化を図ります。

・本年度の方向性について焦点化、重点化を図ります。

・無理のない、無駄のない、ムラのない三無主義に徹した日常的な校内研修推進をめざしましょう。

・一人一人が目標設定をして、課題意識が明確な授業実践に取り組みましょう。

研究の第一歩は振り返りと現状把握です。

研究推進にあたり、まずは平成２３年度の研究テーマ「基礎的・基本的な知識や技能の習得・活用を図る学習指導」の達成度と、具体的な手だてを明らかにすることが必要です。

昨年度は、サブテーマを「チーム力を生かした２つのアプローチ形成による授業づくり」とし、近接学年チームにおける授業づくりに重点をおき研究をすすめてきました。

公開授業、授業参観指導、中間報告会、年度末報告会等、様々な場面を通して、チームの力が高まり、個の指導力の向上し、子どもたちの学力の向上を図っていくことができました。

また、３学期に行った提案授業、年度末報告会を通して、本年度の研究の方向性（研究テーマとサブテーマ）と課題（具体化していく内容と方法）を明らかにすることができました。

ここで改めて、研究の方向性と課題を確認しておきます。

【平成２４年度研究テーマ】

子どもの目が輝く学習の創造 ～聴き合い･語り合い活動を中心に～

子どもの目が輝いている姿は、わかりやすいようで、一人一人の先生方によって捉え方が異なります。また、国語と算数の学習でも異なりますし、学習過程の各段階によっても異なります。昨年度、ＫＪ法を取り入れて行った研修を通して、少しずつ具体化していくことができていますので、24 年度の早い段階に全職員で共通理解を図っていきます。

また、サブテーマである「聴き合い・語り合い活動」についても、学年の発達段階に応じた内容と方法の具体化を図り共通理解を図っていきます。

共通理解を図ったら、組織づくりを進めます。

共通理解を図ったら、校内研究を具体的に推進する組織づくりを見直します。昨年度は、「低学年部」「中学年部」「高学年部」に分かれて研究を推進してきました。

この推進体制は、児童の発達段階に応じた組織化となり、チームとして研究の推進を図ることが可能になりました。また、研究を推進するにあたって、効果的、効率的な組織ともなりました。そこで、本年度もこの３つのチームで研究を推進していくスタイルは継続させていきます。

さらに、本年度は進化のポイントとして、「縦のつながり」を強化させていきます。

具体的には、国語と算数の学習の系統性をより明確に意識していくことになります。そのために、近接学年チームでの授業づくりに加えて、国語部での協議、算数部での協議の場を設定していきます。授業づくりの中心は近接学年となりますが、学校全体というチームもより機能化させていきます。

研究推進委員会の組織については、校長、教頭、主幹、研究主任、そして各部の代表３名で構成することで、機動性を高め、効率的にすすめていきます。学力向上部長は、状況に応じて参加する体制をとっていきます。

組織的研究推進によるアプローチ形成

各部において、国語、算数の２教科について全員で、副主題の具現化に向けて検討して、１学期に公開授業を実施していきましょう。その際、部会ごとに協議会を位置づけ、指導主事等、外部講師の招聘による指導助言を受けていきます。また成果と課題については確実に整理しておくことが大切です。各部会での研修内容については、夏期研修会を企画し、その中で各部からの「これまでの実践と今後の方向性」というタイトルで実践交流会形式の研修会（中間報告会Ⅱ）を実施することで、学校全体での研究の共有化を果たすことができます。

夏期研修会で明確となった課題をもとに、最終報告会として位置付けている11月８日の研究発表会に向けて授業づくりを進めていくことが、主題研究における財産の蓄積を可能にしていくものと考えます。

そして、研究発表会では、これまでの実践を学校全体で検証する場としていきます。ここでは、発表会のスタイルを「受け身型」から「参加型」に転換していくことで、様々な角度から久原小学校のこれまでの研究の検証を行っていきたいと考えています。

２つのアプローチ形成による双方向の研究推進が着実な進歩を創ります

日常的研究推進によるアプローチ形成

校内研究推進の鍵は、研究の日常化にあります。研修会が目的で終わってはならないのです。研修会は日常の授業づくりに生きて働く手段にならなければ、効果的な研究推進はあり得ません。そこで、各部による研究推進と同時に日常的な研究推進のアプローチ形成が重要となります。各部で研修した内容を全教師が日常の授業づくりで活かす方策を構築することが大切です。

具体的には、昨年度と同様に「授業参観指導月間」を設定して、管理職、主幹教諭等が中心となって、参観指導を実施します。

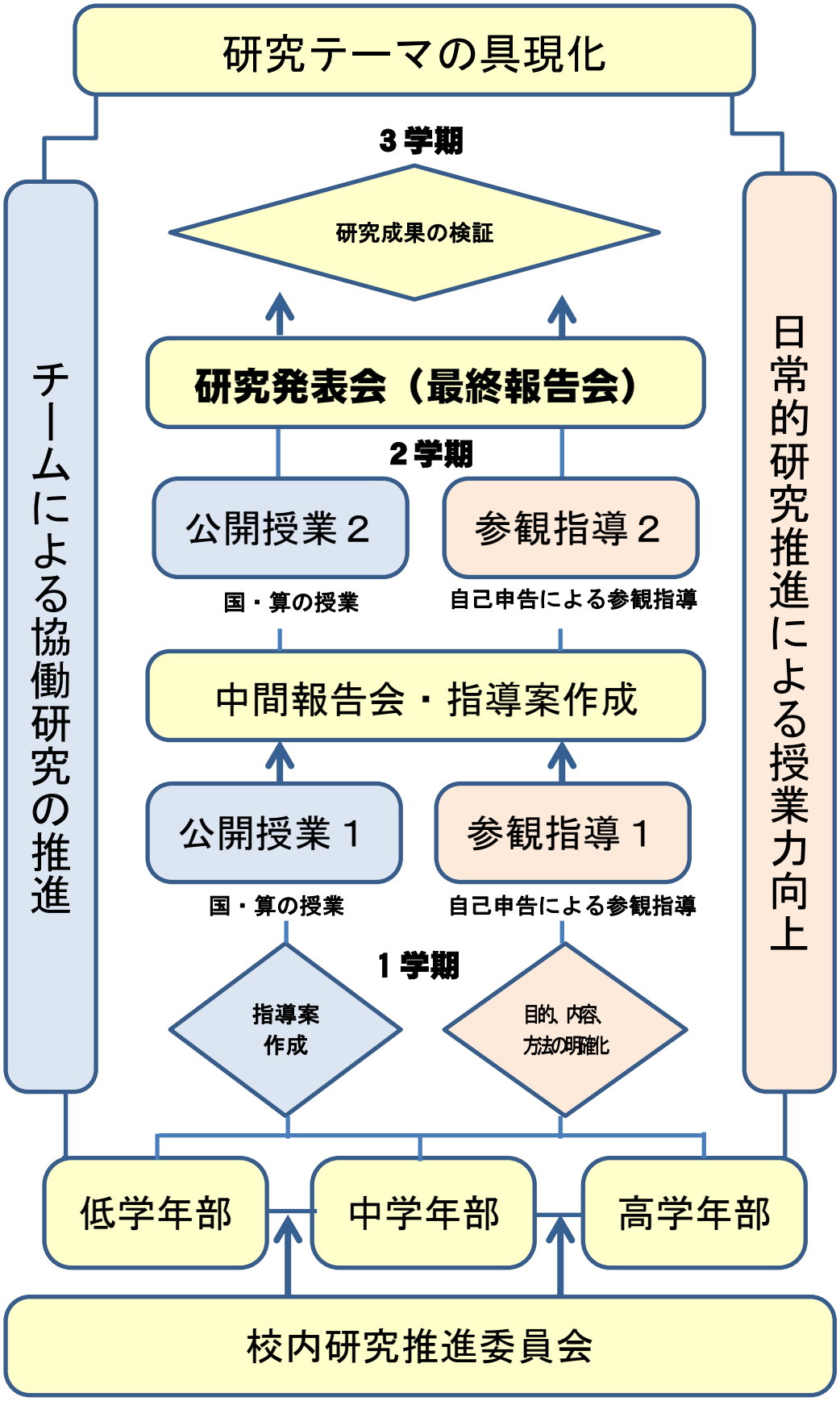
そして、授業者は、参観者に対して「本時の私の授業は、研究テーマの〇〇を目指して、△△についての学習内容を■■の方法で実施します」とはっきりと言える習慣を身につけることで、主題研究に即した日常的授業実践が可能となってきます。参観指導については、指導案の作成の必要もありません。前述した内容を授業者が明確にもった授業づくりを推進していくのです。

小さな成功を重視した研究推進

授業づくりを行っていく際に、よりよいものを目指して、様々な手だてを工夫していくことは、必ず、子どもたちの学力の向上につながっています。

しかし、授業づくりが思うように進まずに、悩むこともあるでしょう。困った時は、一人で悩まず、一人で抱え込まず、その都度、周りの先生に相談することです。それが協働的研究推進となります。決して背伸びをせず、小さな成功を重視した研究推進を心がけることが大切になってきます。何が出来なかったのかよりも何が出来たのかを大切にしていきましょう。

チーム力を生かした研究推進組織へのアプローチ



一貫した研究テーマに基づく授業づくりを 2 方向からのアプローチで